

子育て支援活動における「社会的ネットワーク機能」の重要性

—異業種・異領域へとつながる／拓くネットワークへ—

齋藤 克子（佳津子）

京都女子大学大学院特別研修者

はじめに

地域コミュニティの人間関係の希薄化や核家族化の中、地縁や家庭での子育てが難しい局面を迎え、子育て困難が叫ばれて久しい。1989 年度の出生率の急激な減少が「1.57 ショック」と名付けられ、その後、エンゼルプラン（1997 年）に始まる少子化対策や子育て支援に関連する各種施策が講じられた。この間、官民間わず様々な子育て支援活動が各地で取り組まれてきた。これらの様々な子育て支援活動のネットワーク化の必要性は、多くの研究者、実践者が指摘する事実である。しかし、子育て支援の現場で使用する「ネットワーク化」に向かうということはどのようなことであろうか。ネットワークとは活動と活動を単に繋ぐだけではない。ネットワーク化により、それぞれの活動がさらに発展するだけでなく、それぞれに活動の相互作用が他の活動や団体にも影響を及ぼし、最終的にはその地域において、人々の交流が豊かになり、信頼関係が深くなることで地域の課題が主体的に解決されるようなコミュニティとなることが期待されている。

まず、この論考では、「ネットワーク化」の意味内容を検討するために、1 章では、現在の子育て支援における活動やネットワークの状況を概観した後、2 章では、先行研究における 3 つの「社会的ネットワーク論」の整理と分類を試みる。それをもとに 3 章では、先行研究で分類した「社会的ネットワーク論」を踏まえた上で、地域の子育て支援の実践活動に必要となる「社会的ネットワーク機能」のあり方について事例を通じて検討する。また、先行研究の論考を考察した上で、「子育て」や「育児」のネットワーク化は進んでも、同質性の高いネットワークは、狭い領域の中での課題共有はできても、外からの視点が入りにくく、閉じたネットワークとなってしまう、「子育ての社会化」をより多様な市民社会に問いかけることが困難な現状を指摘し、現在の「子育て支援」の実践現場に欠如する「社会的ネットワーク機能」に必要な要素を検討する。また、このネットワーク機能を有効にするためには、ネットワークの一部分において、新たな「学び」の機能の導入が必要であることを説く。本研究は、子育て支援の実践には、有機的なネットワークが必要と論じられていながら、具体的なネットワークの理論がなかった現状を振り返り、有機的かつ異業種・異領域へのつながりを創成する新たな「社会的ネットワーク機能」の提言を行う。

1. 子育て支援におけるネットワーク

（１）子育て支援の様々な活動と機能について

1990 年以降、様々に行われている「子育て支援」の取組みについて、橋本真紀らが行った質問紙調査では、18 項目の実施内容に整理されている。それらは、①面接相談、②電話相談、③家庭訪問、④親同士の情報交換を目的としたプログラムの提供、⑤親子への遊び提供を目的としたプログラムの提供、⑥サークルづくりを目的とした、プログラムの提供、⑦地域で始まったサークルへの場の提供や運営支援、⑧地域子育て支援センターに関する情報の提供、⑨地域の子育てに関わる社会資源の情報提供、⑩サークル母子保健事業、⑪自由に遊べる場の提供（ひろば事業、プレールームの開放）、⑫利用者（親子）と保育園所在所（園）児との交流、⑬園庭開放（支援センター占有施設以外の保育施設の開放）⑭イベントの開催、⑮講師を招いての講演会、⑯体験保育（親子、親子のみの両方含む）⑰中高生などの体験学習の受け入れ、⑱ボランティアの養成や受け入れ、である。（橋本、2005：78-80）

また、保育学の大豆生田啓友は、現在の子育て支援の機能について、上記の橋本らの先行研究の項目などを参考にし、8つの機能に分類している。それらは、①居場所機能、②相談・援助機能、③保育体験、イベント交流機能、④学習機能、⑤一時保育機能、⑥情報発信機能、⑦アウトリーチ機能、⑧ネットワーク機能、である。この子育て支援の機能は、相互に関連性のあるものであり、有機的なつながりをもってはたらくことに配慮が必要であると述べられている。（大豆生田、2006、関東学院大学出版会：128-129）

1980 年代後半から、市民による子育て支援の実践現場が多く充実し、「子育て支援」活動のネットワークは非常に盛んになってきた経緯がある。特に 1990 年代は各子育てサークルのネットワーク化などが顕著に見てとれる。しかし、筆者は 1990 年代後半以降に充実してきた行政主導による「子育て支援」の各取組みが「受動的」で「客体的」な支援を施し、「サービス享受者」としての親子を増やしてきたことを先の論文で指摘した。（齋藤、2007：151）子育てを困難なものとして定義し、親に「一時保育の提供」を与える、また、「楽しい時間の提供」を与える子育て支援策が行政主導で多く行われるようになり、親子が「子育て支援サービス」を提供される立場となったことは、橋本らが整理した分類項目の⑥や⑦の子育てサークルなどの親子の主体的な取り組みを阻害し、後退させる要因ともなった。しかし一方では、市民活動の発展期に伴い、2000 年以降には課題を持った子育てをしている親同士の連帯や助け合いは更に深まり、「障がいのある子どもを育てる親」、「母子家庭の母親」、「外国人の親」、「アレルギーを持つ子どもの親」のコミュニティなどで、セルフヘルプ的な団体が急増し、NPO などの法人格を取得して活動を継続する団体も増えてきた。これらの活動は子どもや親の持つ課題によって細分化され、それぞれの子どもの持つ課題に対応できるように、きめ細やかな対応をしながら、同じ立場の親をつなぐネットワーク化として非常に進んできたといえる。

しかしながら、これらのネットワーク化が進んできたにもかかわらず、子育て困難や育児への不

安は年々増大するばかりで、児童相談所が対応する虐待件数や相談件数も増加の一途である。これは、行政主導の「子育て支援」が客体的な親を増やし、主体的に課題解決する親を育てなかったからであろうか。または、従来進められてきたネットワーク化では十分に対応できないということなのか。もしくは、そのネットワークの張り方、結び方、発展の仕方やネットワークの機能自体に問題があるのだろうか。

（２）子育ての「社会化」が持つ意味

これらの問題を検討する上で、平成 17 年度の国民白書の中で使われた「子育ての社会化」の概念整理を行いたい。同白書で「子育ての社会化」という言葉が登場して以降、多くの場面で使われるようになった。この国民白書では、「子育て世代の親世代は、子育て世代に対して子育てが辛くて難しいことばかりではなく、楽しく充実感が得られることを積極的に伝えていくことが期待される。そして、親世代だけでなく、同世代の友人、あるいは会社の同僚、近隣に住む人々など、社会全体で何らかの子育てに参加する、あるいはそれができる仕組みを構築していくことが望まれる。子育てが家族の責任だけで行われるのではなく、社会全体によって取り組む、「子育ての社会化」が重要である。」と結んでいる。「子育ての社会化」という言葉を用い、社会全体で子育てに参加する、また、そうできる仕組みを構築することが望ましいと指摘された初めての行政文書である。

吉長真子は「子育ての社会化」は、「介護の社会化」にみられるような、民間委託が質の低い「保育サービス」をもたらし、共同の子育てや保育を实践しようとして運営されてきた「共同学童」や「共同保育」にみられる親の自主性や主体性を剥奪しかねないと指摘する。（吉長，2008，1－2）。筆者が先に指摘した通り、官による子育て支援の施策から誕生した行政主導の子育て支援活動は、親を客体化させ、その主体性を後退させる可能性を持つことは認識しておく必要がある。その一方、「子育ての社会化」という概念に触れたとき、親たちに、子どもが「自分の子ども」であるだけでなく、「社会の子ども」でもあるという意識をもたせる効果は認められる。また、地域の住民には、血縁・地縁を超えて子どもたちを地域社会で育てていくことの重要性を改めて考える機会を与えている。

ジンメル研究者の菅野仁は、ジンメル社会学の根幹を形作る「社会を為す(Gesellschaftung)」というドイツ語の訳語は「社会化」が定訳とされてきたが、「社会関係形成」という訳語を当てたいと提案した。（菅野，2003，30）このことは、「子育ての社会化」という概念に、社会における様々な人や団体との関係形成を促進する働きを読み取る可能性を示唆している。そこから、「子育ての社会化」という概念を、人と人、人と団体との関係の形成に注目した「ネットワーク論」として捉え直す方向で考察を進めていきたい。そこで、次の節では先行研究に即して「社会的ネットワーク論」の整理を図ることとする。

２．社会的ネットワーク論の分類

社会的ネットワーク論は、「ノード・結節点(nodes)」と「つながり(ties)」という観点から社会的な隣接性を考察する理論である。ノードとは、ネットワークに関わりを持つ個人を指し、つながりとは、関係者間の結びつきをあらわすものである。ノード間には考え得る限りの関連性を、様々な種類のつながりであらわすことができ、ネットワークは可能な限りのノードを適切なつながりで全て結んだ地図であると解釈することができる。(佐藤, 2005) ネットワーク理論の先行研究は数多くあるが、その中から、今回の論考に必要な3つのネットワーク論を検討してみたい。

A: 弱い紐帯の強みと強い紐帯の強み

スタンフォード大学の社会学者マーク・グラノヴェッター (Mark Granovetter) の説である「弱い紐帯の強み(the strength of weak ties)」は、個人が発展していくための求職活動等には弱いつながりの方が家族や友人関係のつながりよりもはるかに重要であるという理論である。「あまり知らない」間柄を「弱い紐帯」と呼び、その重要性を明らかにしたものである。

またグラノヴェッターは「交際圏」とは密度の濃い互恵的な相互行為を行う人々からつくられ、他のメンバーと同質的な性質を持ち、情報面も類似性を含んで同質のネットワークになりやすく、別の情報が必要なら、他の交際圏の中で見つける必要があると説明している。別の交際圏へ到達するためには、行為者本人はその二つの交際圏をつなぐ紐帯を見つけなくてはならない。この異なる交際圏を結ぶ紐帯のうち、特にその紐帯がなければ、二つの交際圏に接点が全くなくなってしまうような紐帯を「ブリッジ」と呼ぶと整理している。(Granovetter 1973, 1974, 1360-1380)

また一方で、リンらは、強い紐帯の仮説を説いている。ヒエラルキーの頂上付近においては、職業を成功に導く傾向があるのは、強い紐帯であったとする研究である。(Lin, Ensel, and Vaughn, 1981, 1163-1181)

リンはこれらの弱い紐帯、強い紐帯の先行研究等を検討した上で、以下のように分類している。(リン, 2008, 85-94)

1. 強い紐帯の強み命題：紐帯が強いほど、資源の共有や交換をしやすくする。しかし、強い紐帯がアクセス可能にするソーシャル・キャピタル（社会関係資本）は、行為者本人の持つものと似ているか、少し異なる程度の範囲になる。
2. 弱い紐帯の強み命題：紐帯が弱いほど、異質的な資源へアクセスしやすくなり、よりよいソーシャル・キャピタルを入手しやすくなる。

リンの考察では、「ブリッジ」で結ばれた個人は、それぞれの交際圏内では、他の交際圏との紐

帯を維持している必要があるため、周辺的位置にすることが多いだろうと仮定した。社会的ネットワークは、異なる領域の様々な利害関心によって構築され、異なる利害関心はネットワークの別の場所にある結節点と結びつくものであると考察している。また、社会的ネットワーク内において、ネットワークの結節点にいる者は、他の結節点（行為者）へつながる可能性を直接的にも間接的にも持ち合わせている。リンは、これらの結節点に埋め込まれた資源こそが行為者のソーシャル・キャピタルであるとも指摘している。緊密型の閉じたネットワークは、メンバーにとって実際にはあまり有益ではなく、より拓かれた社会的ネットワークには、社会的空隙や弱いつながりが多く含まれており（下線部筆者）つながりに満ちた閉鎖的なネットワークよりも、より多くの新しいアイデアや機会に恵まれる可能性がある」と述べている。（リン，2008，49-50）

B：ノットワーキング～ネットワーク上に結び目をつくる意味～

フィンランドのヘルシンキ大学の教育学者エンゲストローム（Yrjo Engestrom）は、「拡張的学習」（学びの必要を生じさせる問題の根源を問うときに呼び起される学習で、社会参加の学習であると定義）による理論を展開する中で、「ノットワーキング（knotworking）」という新たな活動システムを提唱した。彼は、多くの行為者が活動の対象を部分に共有しながら影響を与えあっている場において、互いにその活動を協調させる必要があるとき、生産的な活動を組織し、遂行するためのひとつのやり方を「ノットワーキング」と呼んだ。「ノット（結び目）」という考え方で指し示そうするものは、行為者や活動システムは弱くしか結び付いてないのに、それらの間の協働のパフォーマンスが急遽脈打ち始め、分散、共有され、部分的に即興の響きあいが起こってくるということである」と述べている。

また、エンゲストロームは歴史的に確立されてきた仕事・組織・文化・制度の間にある境界を横断していく人間活動の新しい形態に着目して、そうしたコラボレーションを作り出す人々の学習の潜在力や挑戦を教育学的に発見しようとした。彼の説く「文化・歴史的活動理論とは、人間の「活動システム」の文化、歴史的発達に関する理論で、人間の多様な活動を分析し、かつそれを新しくデザインしていくための理論的枠組「活動理論」をさらには教育・学習・発達研究の新しいパラダイムとして捉えている。この「活動システム」における適応的・流動的・自発的なコラボレーションの創発を促すために、「ノットワーキング」という「結び目づくり」と名付けた新たな活動の形態を作り出した。この活動の形態は、人やリソースをつねに変化させながら結び合わせ、人と人との新たなつながりを創発していくような活動の水平的なリズム、協調的な生成を考えたものである。（エンゲストローム，2008，30-40・57-59）

C：ソーシャル・キャピタルー社会的な組織の特徴

「ソーシャル・キャピタル」の言葉は、1916 年、米国バージニア州の農村学校指導主事 L. J. ハニファン (Hanifan) が「学校がうまく機能するためには、地域や学校における地域コミュニティの関与が重要である」とし、善意、友情、共感、社会的な交流といったものを基盤に蓄積される「ソーシャル・キャピタル」が、コミュニティにプラスの効果をもたらすことを指摘したのが初出とされる。(Patnum, 2000, 19) それ以降、複数の研究者がこの用語を使用してきたが、1993 年、パットナムが、南北イタリアのケーススタディーから、同じ施策を実施しても、南北イタリアの「ソーシャル・キャピタル」の違いによってその成果が大きく変わることを指摘して以来、この用語は多くの研究領域で活用されてきた。パットナムのソーシャル・キャピタルの定義は、「お互いの利益に向けての調整と協同を促進するネットワーク、規範、そして社会的信頼などの社会的な組織の特徴を表す」(Patnum, 1995: 66-69) というものであった。

「社会的な組織」の特徴というパットナムの説明は、「組織＝集合体／団体」の特徴と理解され、「システム」としては捉えられなかったこと、また、「ソーシャル・キャピタル」が「ネットワーク」や「信頼」という代替指標を用いて説明されたため、言葉の定義が混乱した。(齋藤, 2008:4) 「組織」という概念は「ある一定の目的を達成するためのシステムである」と定義されることがある。(社会学小辞典 有斐閣) 組織とは「信頼、規範、ネットワーク」など、多くの要素の複合体によって成り立つ仕組み (システム) と理解できよう。

パットナム以降の興味深い論考として、ソーシャル・キャピタルを、ネットワークに埋め込まれ、ネットワークを通じて利用可能になる資源であると再定義しているものや (リン, 2008, 332)、社会福祉の分野の研究者であるシュナイダー (Schneider, Jo Anne) の分析がある。(Schneider, 2006) パットナムはソーシャル・キャピタルの社会的な組織の特徴を「絆型 (bonding)」と「橋渡し型 (bridging)」に分類したが、シュナイダーは、「クローズド型 (closed)」と「橋渡し型」に再分類している。居場所的な機能を持つ「クローズド型」はセルフ・ヘルプ的 (自助団体的) な組織の側面も持ち、信頼を基盤として、そこに居る場合に安心感、共感性、連帯感等を生み出すものである。パットナムの研究では、「絆型」は閉鎖的で排他性が強い性質で、ソーシャル・キャピタルの蓄積には「橋渡し型」がより重要であると論じられる傾向がある。しかし、シュナイダーの論は、社会福祉の現場に応用する際には、「クローズド型」と「橋渡し型」の両方が必要であると論じている。(Schneider, 2006 : 126-129)

3. 子育て支援における「社会的ネットワーク機能」のあり方について

(1) 「中庸なネットワーク」(Moderate Network) の強さ

「子育て支援」分野における先行研究としては、社会学者である松田茂樹の「育児における中庸なネットワーク理論」がある。松田は従来のネットワーク研究から、ネットワーク構造が生み出す力についての説明方法として、ソーシャル・サポート仮説と社会的資源仮説とに分類し、この二つの異なる仮説が対立構造にあることを示した後、新たな「合成効果」の効用を問う「中庸なネット

ワーク」という構想を提示している。ソーシャル・サポート仮説は、強い紐帯の理論を背景としたものであり、緊密なネットワーク構造ほど主として情緒的なサポート効果を発揮するとした。一方、社会的資源仮説はグラノヴェッターの弱い紐帯の強さについての理論の流れをくむものであり、弱い紐帯が多く含まれるネットワークや多様性の高いネットワークほど、情報的に高いサポート力を発揮するというものである。この二つの理論が相対立する仮説として設定されていたが、松田は弱い紐帯と強い紐帯の「合成効果」が存在することを量的な社会調査から示した。世帯外ネットワークの中核である強い紐帯の規模が増えても、その周縁をなす弱い紐帯の規模が増えても、ネットワークのサポート力は高くなる。ネットワーク規模の合成効果とは、これらの2つの力が組み合わさっていることが重要であるということを示すものである。また、ネットワークの密度においても、密度が高くなるほどサポート力が高くなるというソーシャル・サポート効果と密度が疎であるほどサポート力が高くなるという社会的資源効果の両者が組み合わさることで、より大きな効果を発揮していると捉えた上で、密度が中程度のときにネットワークのサポート力が最も高くなり、合成効果が発揮できると考え、そうしたネットワーク構造を「中庸なネットワーク」と名付けた。(松田、2008、P161)

クローズド型と橋渡し型の両方の形態が必要であるというシュネイダーの説も、この松田の研究と類似した研究といえる。また、次項で論じるように、筆者が実践者からの聞き取り調査を行った際にも、この両方の形態が必要なことは、度々導き出される回答であった。聞き取り調査からは、クローズド型と橋渡し型は連続性のある活動として捉え、クローズド型の活動に参加していた参加者が、「新しい契機」をもとに、情報発信や政策提言をも含めた橋渡し型の組織の参加者になることや、クローズド型の参加者が、「新しい契機」をもとに、橋渡し型の組織を新たに創設することもあり得た。しかし、両者には大きな隔たりがあるため、クローズド型の活動の参加者が、すぐに橋渡し型に移行することは様々な面で困難である。

ここで新しく提案するのは、この「クローズド型」と「橋渡し型」の中間に位置する「新しい契機」をつくるシステムを置くことである。「橋渡し型」に活動形態を移行するための「新しい契機」を当事者に与えるシステムが必要なのである。この「新しい契機」は当事者にとっては「学びの場」の機能を有するのである。この子育て支援の「学びの場」は、第1節で橋本が整理した18項目にも、大豆生田が整理した8つの機能にも挙げられていないものである。それは、橋本らの分類による⑮のような講演会でもない、広く現代社会の問題としての子育ての課題について主体的に学ぶ課題や活動を設定できる場である。それは行政主導の子育て支援の場で多くみられる、サービス提供型の子育て支援の活動とは一線を画した、市民が主体となった「学びの場」の企画・運営の実践であるべきである。また、「クローズド型」、「学びの場」、「橋渡し型」は、別々に存在するのではなく、これらを連続性のある活動として、有機的に機能することを目的としたネットワーク化が重要である。この「社会的ネットワーク機能」内は、「ノード」と「つながり」だけの2次元の世界ではなく、螺旋階段状になった、立方体的なシステムを有するものとしてイメージ化することができ

るのではないだろうか。また、そのつながりは「弱い紐帯」または「強い紐帯」という観点だけではなく、状況に応じた自己変容性を持った「可塑性」があるものとする。

(2) コミュニティ・レストランネットワーク京都、そらまめ@RAKUWA の事例より

子育て支援の社会的ネットワークを築く上で、現状の最大の弱点は「同質のグループ」のネットワークに収斂されてしまっていることであろう。子育て支援のネットワークは、横のつながりの連携が図られてきたが、更に多くの市民とともに子育ての問題を共有するために必要とされるのは、違う交際圏、すなわち異業種・異領域へとつながるネットワークを形成することであろう。以下は京都での事例について、異業種・異領域へとつなぐネットワークを模索し、現代の子育てに関する問題を社会に問いかけようとしている2つの事例を報告する。

① コミュニティ・レストランネットワーク京都（コミレスネット京都）

1998年から始まったNPO 情報・研修センターが主催する「協働コーディネーター」講座の参加者が中心となって、「食」を核とした社会課題を解決する場としてのコミュニティ・レストラン（以下「コミレス」）が全国的に広がりを見せてきた。現在は全国で150程度に広がるコミレスであるが、関西地域にはまだ少なく、地域でのネットワークが必要であるため、2011年10月に発足フォーラムを行い、ネットワーク化の事業をはじめた。（事務局担当者は筆者）このコミレスネット京都の「プロジェクト1」で取り組んでいるのは、通常のビジネスモデルで地域の商店街等でカフェやレストランを運営している営利団体と、地域の子育て支援を一緒に取り組んでいこうとするものである。具体的には、「放課後学童居場所事業」というプロジェクト名で、公的な学童保育を終了した小学校4年生以上の学童を数時間お店で預かり、軽食などを提供し、子どもたちは宿題やお店の簡単な手伝いを行って親の帰りを待つ小さな社会貢献のプロジェクトである。放課後留守家庭児童、地域の飲食店という全く異なる異領域の二つを橋渡しすることを取り組み始めている。地域の飲食店とアルバイト等の若年就労者には、現在の子どもを取り巻く状況や課題を認識し、子どもと交わる機会を与え、子どもたちには「就労」や「起業」の大変さや面白さを身近に感じ取る機会となっている。（参考HP：<http://ameblo.jp/kyotokodomokatei/>）

② そらまめ@RAKUWA

2011年8月洛和第二若草保育園（洛和会丸太町病院院内保育所）の2階にNPO法人「京都子育てネットワーク」が運営する「子育てコミュニティスペース そらまめ@RAKUWA」が開設された。この活動は医療機関である洛和会ヘルスケアシステム、NPO法人、カフェ、セルフヘルプグループの4者の協働のもとに成り立っている。乳幼児の保護者が子どもと一緒に参加するこのスペースで、洛和会はインフラの提供や育児に関する講座の講師派遣を行っている。また、「障がい児と親」や

「多胎児家庭」など、課題がある子どものセルフヘルプグループも参画し、居場所型のこの場の運営には様々な工夫が施されている。また、カフェ「café Tuna-Gu」では、旬の食を伝えるためのメニューを考え、外食することが出来にくい親子連れで、気軽に旬の食事ができるような配慮もされている。これらの3つの異なる団体や業種が協働することにより、親が一定の充実した時間を仲間と過ごせ、学びの場を持つことも出来やすいため、より自己主導的な活動主体としての変容をみることができた。(参考HP: <http://soramamewa.exblog.jp/>)

(3) 実践からの考察

この二つの実践に取り組む関係者へのインタビュー調査を通じて、異業種・異領域へと拓く社会的ネットワーク機能を新たに創成する場合、以下の3点の共通項が浮かび上がってきた。

- ① 異業種・異領域へと拓く社会的ネットワーク機能を有するためには、「強い紐帯」、「弱い紐帯」だけではなく、変化可能な「しなやか」な紐帯が必要であること。松田が示した「中庸なネットワーク」の合成効果の理論にプラスして、紐帯は自己変容できる「可塑性」が必要であること。
- ② 「クローズド型」の組織は、いったん内と外を区別し、自分たちが安心した空間を確保するための「居場所」として機能するが、その親子がもつ課題を社会で共有し、意識変革してもらうためには、内から自力で開く「扉」を見つける必要がある。そのためには、新しい契機となる「学びの場」のシステムを置く必要があること。これは、そらまめ@RAKUWA やコミレスネット 京都を開設するにあたって、様々な「学び」の機会を創成し、長年の話し合いがこれらの活動を始める契機となっている。
- ③ 事例のように異なる交際圏を結ぶ紐帯を創成しようとした場合、特にその紐帯がなければ、二つの交際圏に接点が全くなくなってしまうような紐帯をブリッジとグラノヴェッターが定義したように、異なる交際圏や領域をつなぐために、ブリッジ=橋渡し型としての組織の設えが必要である。
- ④ 社会的ネットワーク機能内の「橋渡し型」のシステムは、リンが指摘するように、異なる領域の様々な利害関心によって構築され、異なる利害関心はネットワークの別の場所にある結節点と結びつくものである。社会的ネットワーク内において、ネットワークの結節点にいる者は、他の結節点（行為者）へつながる可能性をもつ者としてファシリテーターと呼ばれ、一つのクローズド型内のコーディネーターとは区別されていることが、コミレスネットの事務局担当や、そらまめ@RAKUWA の子育てネットワークの代表者の機能から浮かび上がってきた。

本研究は、子育ての社会化へと向かうために、新たな子育て支援の社会的ネットワーク機能のモデルを提示するための準備として、社会的ネットワーク論の先行研究の整理を行った。また、現代社会の課題としての子育ての営みを検討する際に、より多くの人にこの問題を共有し、解決するためには、同質の閉じたネットワークではなく、異業種・異領域へと拓くネットワークが必要であることを二つの事例より確認した。今後は、これらのインタビュー調査の内容をさらに分析し、異業種・異領域へと拓かれた社会的ネットワーク機能についての詳細な検討を加えるとともに、この社会的ネットワーク機能のモデルを展望していきたい。

参考文献

- ・大豆生田啓友、『支え合い、育ち合いの子育て支援』2006、関東学院大学出版会
- ・橋本真紀、扇田朋子、多田みゆき、藤井豊子、西村真実、「保育所併設型地域子育て支援センターの現状と課題-A 県下の地域子育て支援センター職員と地域活動事業担当者、保育所保育従事者との比較調査から」『保育学研究』第43号、第1号、2005年、日本保育学会
- ・齋藤克子、「子育て支援施策と実践の相関性について」『日本保育学会第60回大会発表論文集』日本保育学会、2007
- ・平成17年度「国民生活白書」内閣府
- ・Putnam, Robert D, 1993, *Making Democracy Work: Civic Tradition in Modern Italy*, Princeton, NJ: Princeton University Press(=2001 河田潤一訳『哲学する民主主義 ―伝統と改革の市民的構造』NTT出版)
- ・Putman, Robert D, 1995, *Bowling Alone*, *Journal of Democracy*6:1 (=2004 坂本治也、山内富美訳、宮川公男、大守隆編『ソーシャル・キャピタル ―現代経済社会のガバナンス基礎』、東洋経済新報社
- ・Putman, Robert D, 2000, *Bowling Alone—the collapse and Revival of American Community*, New York: Simon and Schuster
(=2006 柴内康文訳『孤独なボウリング-米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房)
- ・Schneider, Jo Anne, 2006, *Social Capital and Welfare Reform*, Columbia University Press
- ・Granovetter, Mark;(1973)“The Strength of Weak Ties”; *American Journal of Sociology*, Vol. 78, No. 6., May 1973, pp 1360-1380 大岡栄美訳 2006 「弱い紐帯の強さ」野沢慎司編・監訳『リーディングスネットワーク論-家族／コミュニティ・社会関係資本』勁草書房 123-154
- ・M. グラノベッター、渡辺深訳『転職-ネットワークとキャリアの研究』1998、ミネルヴァ書房
- ・M. グラノベッター、野沢慎司編・監訳、『ネットワーク論-家族・コミュニティ・社会関係資本』、2006、勁草書房
- ・山住勝広、ユーリア・エンゲストローム編、『ノットワーキング』、2008年、新曜社

- Lin N, Vaughn, John ., and Ensel, Walter M. 1981. "Social Resources and Occupational Status Attainment" Social Forces 59(4)
- ナン・リン, 『ソーシャル・キャピタル—社会構造と行為の理論』 筒井淳也, 石田光規, 桜井政成, 三輪哲, 土岐智賀子訳, 2008, ミネルヴァ書房
- 松田茂樹, 『何が育児を支えるのか〜中庸なネットワークの強さ』 2008, 勁草書房
- 吉長真子, 2008, 「日本における〈子育ての社会化〉の問題構造」東京大学大学院教育学研究科教育学研究室 研究室紀要大 34 号)

参考ウェブサイト

2011 年 12 月 24 日閲覧

- コミレスネットワーク京都 <http://ameblo.jp/kyotokodomokatei/>
- そらまめ@RUKUWA <http://soramamewa.exblog.jp/>